

地震の石碑 2022 おまけ 嘉永小田原地震のかわら版

本多 亮
(神奈川県温泉地学研究所)

昨年(2021年)の3月に、はだの歴史博物館で催されていた「企画展 冬季企画展『天変地異! その時 秦野では!?』」を見学したのですが、小田原地震のかわら版があることを初めて知りました。かわら版自体は珍しいものではなく当時沢山刷られたものですが、調べてみるとなかなか面白かったのでここにご紹介します。

嘉永小田原地震は、嘉永6(1853)年に発生し小田原付近に大きな被害を及ぼした地震で、東京や茨城でも揺れを感じる大きな地震でした。マグニチュード7クラスの地震であったと考えられています。企画展で展示されていたかわら版は「相模国大地震」というタイトルの1枚(写真1)と、どこかの宿場町を描いたらしい2枚のかわら版(写真5)でした。1枚目には地図、2枚目、3枚目は逃げ惑う人のほか富士山や海の様子も描かれています。インターネットで検索したところ、同様のものが、みゆネットふじさわ、東京大学総合図書館(石本コレクション)、東京大学大学院情報学環図書室(小野秀雄コレクション)などから公開されていました。これらのコレクションと比較すると宿場町を描いたかわら版は、石本コレクションでは「嘉永六丑年二月二日相州地震」という資料であることが分かりました。

藤沢市にある藤沢市藤澤浮世絵博物館にも何枚か所蔵されているとのことだったので、令和3(2021)年の3月18日に博物館を訪ねて、

1. 相模国大地震(写真1、2)、2. 相州大地震画図(写真3)、3. 相模国大地震之図(写真4)、という3種類のかわら版を見せていただきました

た。この時対応してくれたのは職員の細井守さん(某有名アニメ監督と間違えられて困るとぼやいておられました)で、いろいろと面白いお話



写真1 相模国大地震(藤沢市藤澤浮世絵博物館蔵)

はだの歴史博物館で展示されていたのは、これと全く同じものでした。同じものは東京大学の小野秀雄コレクションでも見られます。



写真2 相模国大地震(東京大学総合図書館蔵) 石本コレクション I-01-021 写真1の色違いバージョン。

を聞かせていただきました。細井さんによると、前述の資料はおそらく1から3の順に発行が遅いのではないかということでした。その理由として、1は土地名が白抜き文字で、これは非常に簡潔なやり方であり、文字を黒くするほうが手間がかかること、家々がかなり簡単に描かれていること、文章の量も一番少ない、という特徴があげられるそうです。ちなみに、石本コレクションや小野秀雄コレクションでは、白地に黒文字で地名が描かれた「相模國大地震」もありました（写真2）。背景も浮世絵博物館のものよりも多少描きこまれており、少し後に発行されたものなのかもしれません。また、地図の面積は3が一番広く、富士山まで描かれているのが特徴です。細井さんによると、富士山が入っているのはお土産物に近い感覚とのことでした。さらに3では他とは違い、小田原の火災が描かれていることも特徴です。

宿場町が描かれた（と思われる）2枚のかわら版は（写真5）、かなり丁寧に描きこまれていることから少し時間がたってからのものなのかもしれません。石本コレクションの中には、その初期バージョンと思しきものもみられます（写真6）。こちらでは絵が一枚にまとめられていますが、背景の描きこみがかなり簡単です。ただ、逃げ惑う人や馬、船の形などは同じなので、こちらがより早い段階で刷られたものであらうと思われます。一方、小野秀雄コレクションには、写真5とほぼ同じ絵ですが違う版であることを示す落款のあるかわら版があり、原版を複製して複数の場所で作成されたのかもしれない。現在でいうところのリツイートみたいなものでしょうか。

文章のほうをみてみましょう（翻刻は各コレクションのウェブなどを



写真3 相州大地震画図（藤沢市藤澤浮世絵博物館蔵）



写真4 相模國大地震之図（藤沢市藤澤浮世絵博物館蔵）

ご覧ください。）。「相模國大地震」には、小田原城下のほか東は荻野山中藩（厚木付近）、西は沼津や吉原宿付近まで被害が出ていることや、本震の後に何度も揺れが襲った様子が書かれており、「大ゆれに いたせし事 五度にして」というのは大きな余震が5回くらいあったということかもしれません。最後に「此よし諸国の親類 糸ん者へ知らせん 為一紙に くわしくしす」とあり、

地震後に急いで刷られたかわら版なのかな、とも思われます。「相州大地震画図」になると、もう少し情報量が増えます。箱根の二子山や金時山が崩れ、畑宿なども被害があって三島などとの往来ができなくなったこと、江戸でも家や土蔵が痛んだことも書かれています。また、信州善光寺の地震の際に人々が驚いたのも無理はない、といった記述もあります。いわゆる善光寺地震は嘉永小田



写真5 「嘉永六丑年二月二日相州地震」 東京大学総合図書館蔵 石本コレクションI-05-033

「東海道吉原宿之版」と欄外に記載があります。中身は全く同じですが、「信松山丸之版」とかかれたものが小野秀雄コレクションの中にありました。よく見ると、お城の形などがわずかに違うようなので、違う土地で増刷して売するためにオリジナルのかわら版を元に異なる彫師が彫ったものなのかもしれません。はだの歴史博物館では写真1のかわら版と一緒にこのかわら版が展示されていました。



写真6 「相模大地震」 東京大学総合図書館蔵 石本コレクションI-05-046

写真5と同じ内容ですが、かなり簡単な絵なのでこちらのほうが早い段階で刷られたものかもしれません。

原地震の6年前ですが、ここに書かれているのは同じ年の正月にあったものようです（善光寺地震の余震でしょうか？）。

「相模国大地震之図」ではさらに記述が増えます。町の被害も詳細になり、伊勢原付近から平塚付近は二百軒民家があれば無事なのはわずかに二軒ほどであるとか、駿河の国との往来は三日止まったなどの記載がでています。被害の具体的な数字も挙げられています。小野秀雄コレクションの同名のかわら版では、被

害を受けた家は20600軒あまり、人的被害1260人、被害を受けた馬の頭数575頭となっています。しかし、写真3では、人的被害3780人、馬523頭、牛35頭などになっており、これもかわら版が刷られた時期の違いを反映しているのかもしれませんが、これらの数字は伝聞によるものでしょうから、多くの被害があったことは事実としても数字自体はあまり信用できないかもしれません。

興味深い記述としては、箱根では

「湖水あふれ出 さいのかはら（賽の河原：現在の元箱根港付近）大いにくづず」とか、「豆州ねぶ川（根府川）石きれ（土砂崩れ）老若男女ぞく死」のようにセイシュ（静振）や土砂崩れの描写があげられます。セイシュというのは湖などが地震で揺らされて発生する一種の津波のようなもので、東北地方太平洋沖地震の際にも芦ノ湖で観測されています（原田ほか, 2014）。また、根府川の土砂崩れは大正関東地震の際のものが有名ですが、この地震でも同様の

被害があったというのは教訓的です。箱根、大山、伊豆の山々など、山崩れの様子はかわら版以外の資料、例えば平塚出身の実業家、福住正兄が記した「地震日記」にも知人が魚商人から聞いた話として「いずの国の伊東の山動きだし高くなりひきくなりしすると見る内、海原に一筋の道を立て同じさまにゆりだし、早川の流に入て小田原より雨降山（大山）のほうへと動き出しつ。」といった描写があります。詳細は分かりませんが、伊豆から伊勢原にかけて発生した大規模な山崩れの目撃談ではないかと思っています。

少し話が脱線しますが、この「地震日記」には地震発生直後の様子として「かねてかかる時持のくべき心かまへし置きたる九折（つづら）を

負ひ、火桶を諸手に持て出る程、そこらの鴨居などの落ちるさま恐ろし」という記述があり、きちんと避難用具を準備していたのだなと感心しました（「地震日記」は西さがみ庶民史録（1995）に収録された翻刻を参考にしました。）

参考文献

西さがみ庶民史録 江戸時代から近未来まで 西さがみ地震《西さがみ庶民史録》地震記事総集, 1995, 播摩晃一編, 西さがみ庶民史録の会

原田昌武・板寺一洋・行竹洋平, 2011 年東北地方太平洋沖地震によって励起された芦ノ湖のセイシュ（静振）, 神奈川県温泉地学研究

所報告, 第 46 巻, 9-16, 2014

東京大学総合図書館所蔵 石本コレクション

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ishimoto/page/home>

東京大学大学院情報学環図書室

小野秀雄コレクション <http://www.lib.iii.u-tokyo.ac.jp/collection/ono.html#top>